ている糖尿病の犬に注射したところ、血液中の糖分は着実に減り、二、三時間もすると犬は立ち上がって尾を振るほどになった。ほとんど奇跡に近かった。物質Xはあったのである。この物質は初めアイレッティンと名づけられたが、のちにマクロード教授の提案でインシュリンと改名された。

翌年一月、レオナード・トムソンという、二年間も糖尿病をわずらい、体重も三〇キロに減ってあと二、三週間しかもたないだろうと思われていた十四才の少年に、インシュリンが注射された。糖尿病にかかった人間への、初めてのインシュリン注射である。

トムソン少年は、まもなく元気を回復し、普通の食事がとれるようになり、そげた頬もふくらんだ。彼はあと十三年も生き延びたが、死んだのは糖尿病のせいではなく、オートバイ事故のあとにかかった肺炎が原因だった。

一九二三年、バンティングにノーベル賞が授けられた。彼はその賞金を、ベストと折半した。

ガン撲滅のために片足で五、〇〇〇キロ走破

テリー・フォックス

五千三百キロ、というと、いかにマラソン選手でもためらう距離だ。それを、ガンで片足を失くしたカナダの青年が、およそ五か月をかけて走り抜いた——。途中でガンが肺に転移しなければ、おそらく予定通りカナダの東端から西端まで八千三百余キロを完走していただろう。ガン撲滅のために。そして自分自身のために。

テリーが右足をひざのすぐ上から切断されたのは四年前、十九才のときである。運動神経が抜群で、通学していた高校でその年の最優秀スポーツマンに選ばれたばかりだった。ある日、右足に痛みを感じ、それがガンのせいだと分り、三日後に切断された。スポーツ方面に進みたいという彼の夢は、一夜にしてくずれてしまった。

しかし、テリーはくじけなかった。間もなくサイモン・フレーザー大学（ブリティッシュ・コロンビア州）に入学した彼は、ガン研究のための寄付を呼びかけようと、大陸横断のマラソンを決心する。

「私は夢を見ているのではありません。これ（マラソン）によってガンに対する確実な答えや治療法がでるとも私は考えていません。しかし私は奇跡を信じます。信じなければならないのです」——テリーは、このように述べて支援を仰いだ。

当初は、いったんこうと決めたらやり通す彼の頑固さを知っている父親でさえ、「本気か」と驚いたほどだったが、家族やガン協会を中心に、周囲の理解も高まっていった。

同時に、テリーは練習を始めた。最初は彼の故郷ポート・コキトラムの町の通りを、一キロほど右の義足をいたわりながら走った。それを毎週一キロずつのばし、とうとう一日に四十二キロまで走れるようになった。

そして昨年の四月十二日、テリーはカナダの東の端、ニューファンドランド州セント・ジョンズで大西洋の水に義足をつけたあと、「マラソン・オブ・ホープ」（希望のマラソン）のスタートを切ったのである。それから後は、雨が降っても雹が降っても、走り続けた。義足は何度もはずれ、痛み続けた。トラックがびゅんびゅん飛んできて、道から落とされそうになったこともあった。

それでも彼は走り続けた。やがて、彼の行動に感激した人々から寄付が集まってきた。沿道の市町村が、いろいろな団体が、そして一般市民が寄付を申し出た。ラジオやテレビが特別番組を組み、テリーの呼びかけを応援した。

しかし「希望のマラソン」は予定の三分の二を過ぎた北部オンタリオの路上で中止となった。息をするのが苦しく、胸に痛みを感じたからである。ポート・アーサー総合病院で検査した結果、左肺が一部つぶれていることが分った。ガンが肺に転移していたのである。テリーは間もなくブリティッシュ・コロンビア州の病院に移され、化学療法を続けている。

現在までに集まった、あるいは約束された寄付金は、総額二千万ドルをこえた。この金は、テリーの希望通り、ガンの研究と研究者の養成のために使われることになっている。

彼の勇気、意志そして献身に対して国中から賛辞が寄せられた。カナダ政府は、カナダでは最高の勲章を授け、その栄誉をたたえた。

革新的メディア論

マクルーハン

トロント大学教授のマクルーハンは謹厳で生真面目な人物である。六〇年代の